



宇治川太閤堤跡

2009

宇治市教育委員会

宇治川太閤堤跡

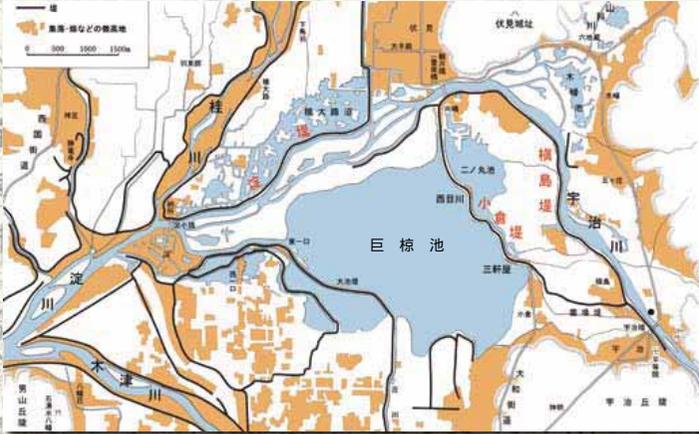
平成 19 年夏、京都府宇治市の宇治川右岸で豊臣秀吉が築造したと思われる「太閤堤」の遺構が発見されました。このパンフレットでは、2年にわたって行った発掘調査の概要を報告します。

宇治川太閤堤跡の位置 宇治川は唯一琵琶湖から流れ出る河川で、滋賀県側では瀬田川と呼ばれ流域的には淀川となります。大戸川との合流地点の南から峡谷へと入り、滋賀県と京都府の境で名を宇治川と変え、峡谷を縫うように流れ宇治へ至ります。この谷口部に開けたのが宇治であり、平等院・宇治上神社などの古社寺や伝統的な町並が広がる、観光宇治の中心部ともなっています。

宇治は京都の南郊、奈良と京都を結ぶ途中に位置しており、大化二年(646)架橋を伝える宇治橋に代表されるように、古来急流に名高い宇治川の渡河点として交通の要衝地でした。宇治川太閤堤跡は、この宇治橋東詰から約400m下流の宇治川右岸で発掘されました。

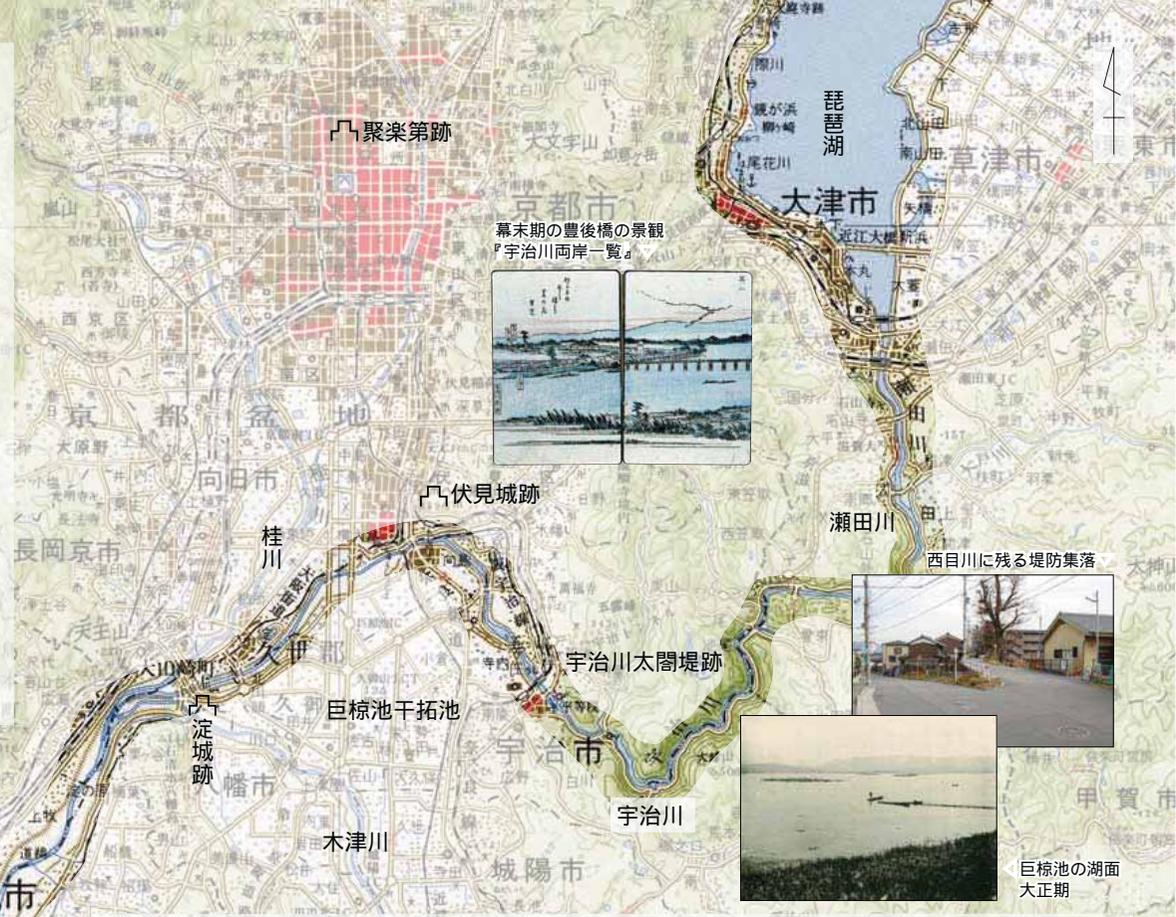
変化する流域の景観 宇治市域の北西部、久御山町や京都市伏見区と接する辺りは、広大な水田地帯となっています。巨椋池の干拓地域です。かつて宇治川は、宇治橋下流で流れを大きく西へと取り、この巨椋池へと注ぎ込んでいました。また南山城盆地を北流してきた木津川も流れ込み、大きな遊水池を形成し、淀川となって流れ出していました。この宇治川の流れをささげり、横島堤で川筋を向島まで延ばし、池中に小倉堤を造ったのが太閤堤と呼ばれる一連の工事です。これによって「入江」や「巨椋入江」と呼ばれた水面変動の激しい沼沢が「巨椋池」や「大池」と呼ばれる湖水的なものへと変化しました。つまり太閤堤の築堤が巨椋池を造り出したといえます。

巨椋池の成立は、沿岸の人々に豊かな漁を約束しました。同時に遊水機能を失った池は洪水をも頻発させるようになりまし。明治 43 年(1910)の淀川改修工事で、巨椋池を淀川から切り離す工事が行われましたが、水質悪化を招き漁獲高が大きく減少し、干拓へと進んでゆくこととなります。昭和 16 年の干拓完了によって 634ヘクタールの農地が生まれ、巨椋池は歴史の幕をとじました。



巨椋池周辺の堤(○が調査地)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を複製したものである。(承認番号 平20近復、第112号)



幕末期の豊後橋の景観『宇治川兩岸一覽』



西目川に残る堤防集落



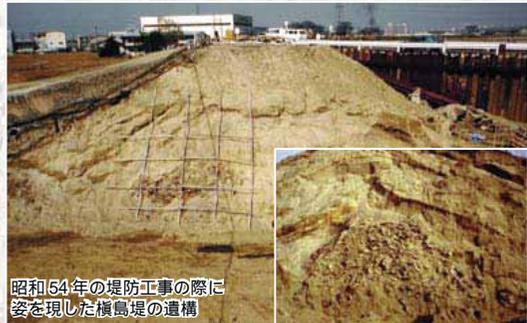
巨椋池の湖面大正期

太閤堤の築堤

太閤堤とは 現在「太閤堤」という用語は、文禄3年(1594)に豊臣秀吉の伏見城築城に伴って行われた、大規模な治水土木工事の総称として使われる場合が多いようです。そもそも「太閤堤」という言葉の初出は、幕末の『宇治川兩岸一覽』(1863年刊)のようで、この中の「秀吉公の築かせ給ふ故に、俗に太閤堤」とある部分が該当すると考えられています。本来は、場所ごとに小倉堤あるいは横島堤と呼んでいたと考えられます。また、秀吉が近江の長浜城主だった天正4年(1576)に高時川右岸に築かせた堤防も、地元では太閤堤と呼ぶことがあるようです。

変わる宇治川の流れ 天正20年(1592)、秀吉は京都伏見の地に隠居屋敷造営の普請を始めます。翌年の文禄2年(1593)の暮れには隠居屋敷を本格的な城郭に造りかえることと、広大な城下町の建設に着手します。この普請の一環として太閤堤が築かれることとなります。

太閤堤が築堤されるまでの宇治川は、宇治橋の下流で分流し、主流は西方の遊水池である巨椋池に流れ込んでいました。そこへ横島堤を向島から宇治までの宇治川左岸に築いて宇治川をひとつにまとめ、今日見るような流れにしました。横島堤は別名宇治堤と呼ばれました。横島堤によって伏見まで引き入れた宇治川を、三栖から淀まで淀堤を築いて淀川と結び、伏見・大阪間に水運を開きました。また堤上は現在と同じように街道として機能し、陸路も同時に整備されました。さらに向島から小倉までの巨椋池中に小倉堤を築きました。小倉堤上は、宇治を経由せず伏見を通る新たな大和街道として利用されました。



昭和54年の堤防工事の際に姿を現した横島堤の遺構

発見された太閤堤の遺構

宇治川太閤堤跡で発見された護岸遺構は、それぞれの場所に応じて形を変えながら250m以上続いています。護岸遺構は、宇治川の流れが長い年月をかけてつくりあげた自然の段差（河岸段丘）と、現在は茶畑が営まれ、かつては宇治川の流れによって形を様々に変える砂洲であった部分との境界線上に位置しています。

護岸の形態は北から、石を積み上げ、その上半分に石張りを施した「石積み護岸」。杭や板材などの木材を多用し護岸を垂直に築き上げた「杭止め護岸」。さらに南側では、まだ不確定な部分が多いですが、河岸段丘を利用し所々に水制を付設するという方法で護岸を構築しています。

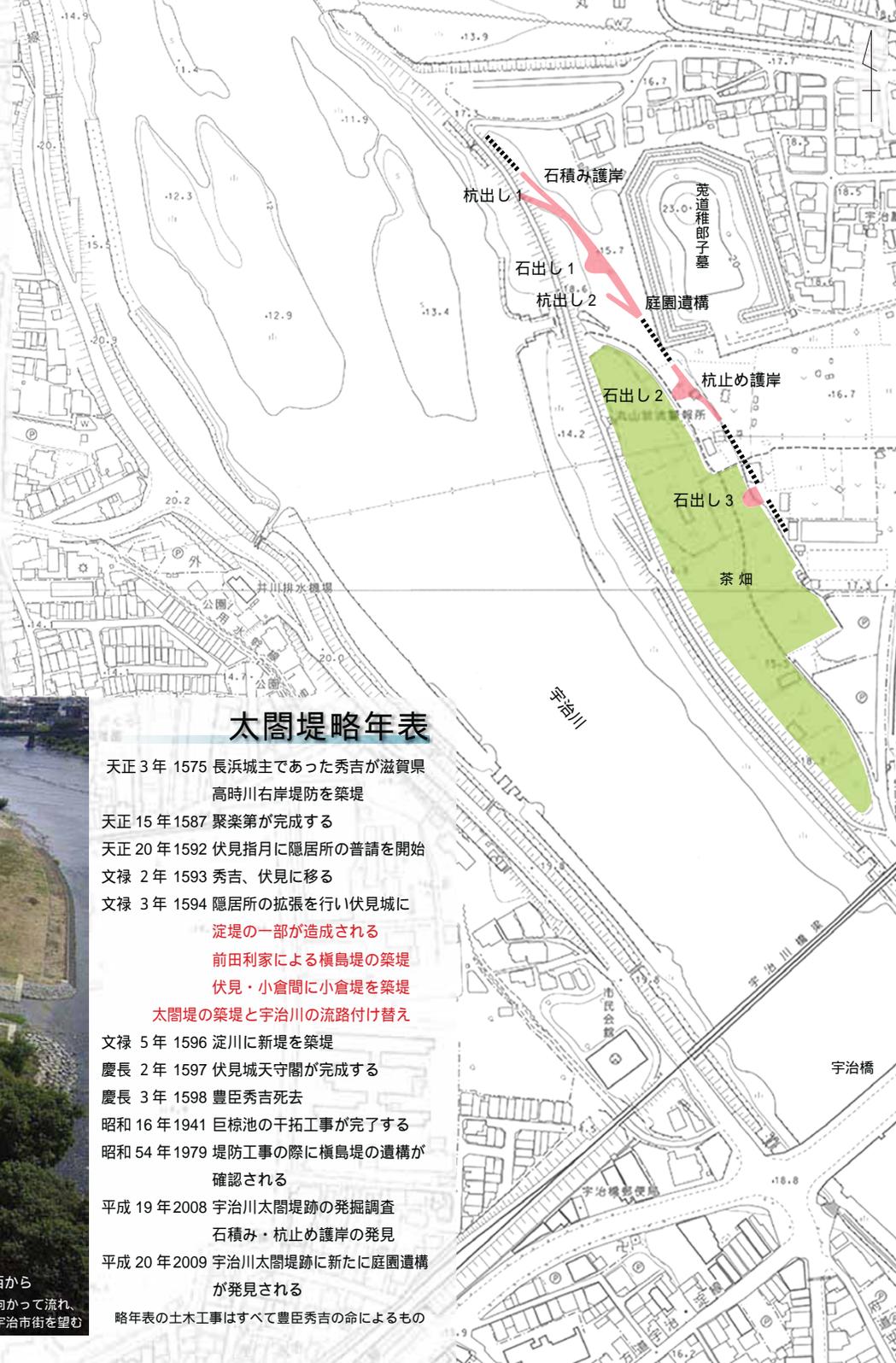
また最南端で見られるような水制と呼ばれる護岸に造り付けられた構造物が、遺跡の全域で場所に応じて2種類、合計5ヵ所設置されているのも特徴のひとつです。



石積み護岸の注水状況：北から



遺跡全景：北西から
宇治川は右下に向かって流れ、
上方に宇治橋と宇治市街を望む



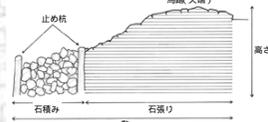
太閤堤略年表

- 天正 3年 1575 長浜城主であった秀吉が滋賀県高時川右岸堤防を築堤
 - 天正 15年 1587 聚楽第が完成する
 - 天正 20年 1592 伏見指月に隠居所の普請を開始
 - 文禄 2年 1593 秀吉、伏見に移る
 - 文禄 3年 1594 隠居所の拡張を行い伏見城に
淀堤の一部が造成される
前田利家による横島堤の築堤
伏見・小倉間に小倉堤を築堤
太閤堤の築堤と宇治川の流路付け替え
 - 文禄 5年 1596 淀川に新堤を築堤
 - 慶長 2年 1597 伏見城天守閣が完成する
 - 慶長 3年 1598 豊臣秀吉死去
 - 昭和 16年 1941 巨標池の干拓工事が完了する
 - 昭和 54年 1979 堤防工事の際に横島堤の遺構が確認される
 - 平成 19年 2008 宇治川太閤堤跡の発掘調査
石積み・杭止め護岸の発見
 - 平成 20年 2009 宇治川太閤堤跡に新たに庭園遺構が
発見される
- 略年表の土木工事はすべて豊臣秀吉の命によるもの

石を積んだ護岸

石積み護岸は、遺跡の最北端で確認した護岸形態です。上段の石張り部分と下段の石積み部分の2段構造となっています。現在の宇治川右岸堤防とほぼ平行にはしる護岸遺構を85m確認しました。護岸の規模は、馬踏(ばふみ、堤防上の平坦面)幅が2m、敷幅(護岸の底辺幅)が4.7~6m、高さが2.2m、法面の平均傾斜は30°を測ります。南北に長い遺構は、中ほどで川の方へ緩やかに屈曲しています。その屈曲点の前後には、石出しと杭出しの2種類の異なった形の水制が設置されています。

石積み護岸部分名称図



石を張る

護岸遺構の石張りは、石積み直上の法面から馬踏にかけて板状の割石を張りつけたものです。石を張った際に裏込めなどの処理はなく、簡単な整地だけで板状割石を張り付けただけだったと考えています。割石の間の目地埋めはされておらず、最大10cm程度の間隔で敷き詰められています。

石積み護岸全景：南から



石張りの状況：北から
検出状況と作業風景



石張りとは積み

石を積み

石積みは、護岸の最下部に2~4本の止め杭列を打ち込み、その内側に割石を詰め込んで護岸としています。幅2.5mで充填された割石は拳大~人頭大が大半です。最下部には最大50cm程の巨大な割石があり、しっかりと杭に当てて割石の流出を防いでいます。実際に護岸の機能を果たしていたのは、この石積みであったと考えています。



太閤堤を造りあげている石材

護岸遺構や水制遺構に使用されている石材は、一部では宇治川由来と考えられる川原石が少数混じるものの、大半は頁岩・粘板岩と呼ばれる板状に割れやすく、加工しやすい石材です。

調査地より宇治川を3km上流に遡った天ヶ瀬付近には、頁岩・粘板岩を主とする天ヶ瀬層という地層が広がっています。そのため調査地より上流の宇治川筋が主な産地であったと考えています。

昭和54年に発見された槇島堤の遺構も同様の石材で、太閤堤の築堤の際に大量の石材が調達されたことを示しています。このように太閤堤の築堤に関しては、使用石材の寡占供給という特色のある材料調達の在り方を示しています。



護岸遺構の石張り
調査地上流の粘板岩の露頭



杭止め護岸全景：北から
杭止めの様子
庭園遺構全景：西から
庭上段のため池

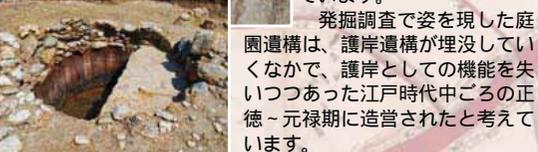


作業風景

木材を多用した護岸

杭止め護岸は石積み護岸の南(上流)25mに位置し、木材と割石で垂直に築きあげられた杭止め構造の護岸形態です。

杭止め護岸は、直径8cmのかせ木と呼ばれる杭を15cmの間隔で密に打ち並べ、その内側に割石を充填しています。割石の大きさは拳大から40cmほどで、石積み護岸の割石よりも青みが強いものが多くみられます。かせ木の前面には、直径16cmの支柱が打ち込まれ、かせ木との間の上端に挟み込まれた頭押えの横板と共に護岸の前倒れを防いでいます。35mを確認した杭止め護岸の中央には石出しがあり、その上流側では、護岸の高さが2.4mに達するところもあります。石積み護岸との大きな違いは、護岸に傾斜面がなく、垂直に造られている点です。



護岸上の庭園

石積み護岸と杭止め護岸の間では、護岸遺構のライン上に営まれた庭園遺構を検出しました。西からの流れを受け止める上下2段の池と洲浜状遺構で構成されています。

発掘調査で姿を現した庭園遺構は、護岸遺構が埋没していくなかで、護岸としての機能を失いつつあった江戸時代中ごろの正徳～元禄期に造営されたと考えています。

『宇治郷総絵図』江戸時代中期太閤堤の築城から約250年後前ページの地図とほぼ同範囲だが調査地付近は宇治郷ではないため当絵図に詳細には描かれていない

川を制御し、護岸を守る

護岸遺構には、遺構から川へ張り出して造られ、堤防や護岸への水流の激突や洗掘を防ぐための施設があります。これは現在では水制と呼ばれ、堤防にあたる水の勢いを弱めて土砂の堆積を促したり、流路の確保といった役割を果たしています。これらは川除と呼ばれ、当時の治水手法は「堤川除普請」と呼ばれました。

水制は設置する川の性格や周囲の環境によって構造や使用材料が異なりました。今回の調査では、護岸から垂直に張り出し、石で造られた「石出し」、護岸から下流側に向けて杭列を長く出した「杭出し」の2種類の水制を検出しています。また水制は水制群となって初めて機能することから、川の状況に応じて複数設置されることが多く、合計5基の水制を確認しています。



石出し1全景
北西から



石出し1下流側の石垣



石出し3：北から
検出状況と作業風景



石出し3全景：北西から



石出し上面の石張り

石と杭の水制

3カ所で検出した石出しは、石積みの土台に台形状に石垣を組み、中に割石を充填し、上面には護岸と同じく石が張られていました。特に石出し1の下流側の石垣は、太閤堤が造られた頃の石垣の特色を色濃く残しています。石垣部の規模は、幅9m、突出長8.5m、高さ1mです。

2カ所で検出した杭出しは、3本の杭列の中に割石を充填していません。直径15cmの杭を使用し、幅2m、全長20m以上と推測されます(先端が調査区外のため)

杭出し1全景：北西から



発掘調査の意義

宇治川太閤堤跡の治水技術 発掘した護岸遺構がなぜ地点ごとに形態が違うのかは、普請担当大名の差という意見や、水制を単位とした1スパン工法説などが考えられてきました。しかし構造の違いは発掘情報の精査によって、それぞれが築かれた地形に応じて護岸の施工方法が選択されたのではないかと考えられるようになりました。石積み護岸と南端の部分では自然地形をある程度利用しているのに対して、杭止め護岸付近は谷状の地形を人為的に埋め立てているため、この土質や地下水への対応のため、杭で止める護岸構造になった可能性が考えられます。

また石出しの上部は、本来は石張りが行われていることも判明しました。当時の技術書に描かれる石出しは、盛土の表面に石張りを行うとされています。太閤堤跡の石出しの基本構造である石積みの中に割石を充填する方法は、秀吉による文禄・慶長の朝鮮出兵の時にかの地で造営された倭城の構造と類似します。宇治川太閤堤跡には、当時の最先端である築城に関する様々な技術が応用されているようです。

護岸遺構の造営時期と埋没年代 今回の発掘調査で確認された護岸遺構は、北端の石積み護岸から石出し3までの範囲で続いています。護岸構造は部分によって違うものの、護岸の全体的な線形はきれいにつながり、一連の遺構であることが十分に理解されます。さらに石出し3から南に延びる河岸段丘線と、護岸遺構の推定延長線は合致しています。つまり、護岸遺構は石出し3で検出したように、南では河岸段丘を利用し所々に水制を構築している可能性が考えられ、少なくとも宇治橋まで400m以上にわたって続いていたと推定してよいと思います。

発見した護岸遺構は治水施設という性格から、築造年代を直接推定できる出土遺物が乏しく、埋没年代を含めた検討が必要となっています。この資料のひとつとして、庭園遺構の下層の瓦群があります。庭園遺構は護岸遺構の埋没過程で盛土をし、護岸の上層に造営されています。この盛土中の瓦群は、宇治地域の寺院に使われている瓦との比較から、17世紀末から18世紀初頭にほぼ限定できます。また庭園遺構と、石出し1の崩落石中、杭出し1から瓦群と同時期の完形の土師皿が出土しています。つまり17世紀末頃のこの辺りの護岸は、庭園遺構付近は既に埋没し、その下流の杭出し1付近ではいまだ機能していたことを証明します。全体が急速に埋没したのは18世紀末頃ようです。

この巨大土木構造物に使用される石材調達のあるり方、石出しにみられる文禄・慶長期の特徴を示す布積み技術、さらにこのような埋没に関する年代を踏まえるとき、この遺構が歴史に名を残す太閤堤の一部であることは、間違いのないことと考えられます。



宇治川太閤堤跡

平成21年(2009)3月31日

宇治市歴史資料館

〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1

TEL0774-39-9260 / FAX 0774-39-9261

E-mail shiryokan@city.uji.kyoto.jp

表紙：石積み護岸全景 北から

裏表紙：昭和55年(1980)頃 宇治川上流をのぞむ